

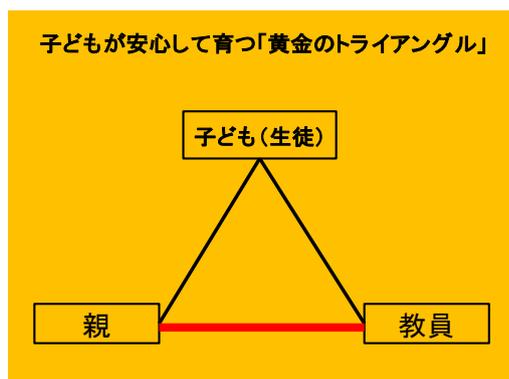
5月12日（PTA 総会挨拶）

子どもの見方 子どもの味方

皆様、こんにちは。狩野でございます。日曜日の午後は、いつもならば外出されたり、ご自宅でのんびりされる時間ではないかと思いますが、多くの保護者の皆様にお集まりいただき、心から感謝申し上げます。

今日は保護者というお立場でご参加いただいております。ご家庭に戻られると母親や父親、また妻や夫になります。私たち大人もそうですが、子どもたちも一日のうちに何度も立場を変えながら生活をしています。例えば、親の前では子ども、おじいさんやおばあさんの前では孫、教員の前では生徒、教室入ればクラスの仲間、部活動に行けば先輩や後輩という立場。このように一日のうちに色々と立場を変えながら生活しています。その中で、子どもたちは社会性や規範意識など社会で生きていく術や力を身に付けています。そして、子どもたちは立場によっていろいろな顔を持っています。親に見せる顔、教員に見せる顔、友達に見せる顔。つまり、私たちが見ているのは子どものある側面だけということになります。そのある側面だけで子どもを判断したり、評価していないだろうか、と思うんです。ご家庭での子どもの様子、学校での生徒の様子をそれぞれ見ている保護者の皆さんと教員が、強く太いパイプで結ばれて、いつでも連絡を取り合えて、何でも話せる関係を築くこと大切だと思っています。

生徒たちに「〇加高校はどんな学校ですか」と質問すると多くの生徒が「先生と生徒の距離が近い学校です」と答えます。〇加高校はもう一つ「保護者と教員の距離も近い学校」そういう学校を一緒に作ってまいりたいと考えています。



親と教員という立場が違う私たちが子ども支えている良さがあります。例えば、ちょうど今、中間審査中ですので、もしかしたら「いつまでテレビば見よっとね、早よ勉強せんね。」と言われることがあるかもしれません。その時、子どもは「うん。分かった。今から勉強するね。」と言うのでしょうか。子どもの反応はこうですね。「分かっさ、今からしようと思っったっさ。もうやる気のなくなっしもた。」恐らくこれ

が全国共通の子どもの反応です。子どもというのは、親から正論を直球で投げられると腹を立てるようになっていきます。しかし、同じ言葉でも立場が違う人から言われると素直に聞けるのも人間です。ですから「勉強しなさい」は教員が生徒に言う言葉であって、子どもが親に期待する言葉ではないということです。

では、子どもたちは私たち大人に何を期待しているのでしょうか。あるアンケートで「信頼できる大人は？」と中高生に聞いたところ、圧倒的な第1位は「話を聞いてくれる大人」です。大人はついつい自分の価値観や考えを一方向的に子どもに話したくなるものですが、子どもは自分の良い分も聞いてくれと思っているんです。子どもの話にも耳を傾ける大人でありたいと思います。第2位は「認めてくれる大人」です。ゴールデンウィークの直前に、多くのマラソンランナーを育てられた小出義雄さんの訃報がありました。高橋尚子さんが葬儀の弔辞の中でこうおっしゃっていました。「監督からは『強くなったなあ』とか、『毎日毎日全力で走り、一日たりとも力を抜いた日はなかったよ』と監督が認めてくださった言葉が、結果より嬉しかったかもしれません。高橋尚子さんには才能が開花する前から「マラソンなら世界一になれる」と毎日ささやかれたと言います。

また、増田明美さんはこうおっしゃっています。「小出監督が走っている選手にかけることばは『いいね』『最高』これだけでした。『いいね』『最高』と言いながらもずっと選手の動きを見ているんですよ。走ったあとに具体的にほめたり、ダメなところはダメって言ったりしていました。小出さんの指導法は観察力だと思う。だから選手たちはのびのびと厳しい練習にも耐えてメダルを取っていったんだと思います」

私たちはついつい欠点とか短所に目が行きがちですが、少し角度を変えて子どもを見ると良いところが沢山あります。人は欠点や短所ではなく、長所や強みを生かして将来、社会で活躍していきます。私たち大人は多面的に子どもたちを見る目を持ちたいものです。

最後に、雲仙市で「雲仙たねの自然農園」の経営をされている岩崎さんという方が次のようにおっしゃっています。

「種を採り、野菜を育て続けて分かったことがある。期待を持って育てれば、作物も生産者に嫌われないよう育とうとする。野菜の持っている欠点を摘むことばかりを考えずに、長所を伸ばす。そうしながら種取りを重ねると、5年、10年後に結果が出る。まるで子育てのよう。」

私たち大人は子どもたちの味方でいたいと思っております。これからも手を携えて子どもたちのために顔晴ってまいりましょう。本日はご参加くださり、誠にありがとうございました。